

若い世代への期待

写真は『世界』6月号の宮本憲一×斎藤幸平「特別対談」第2回。第1回は4月号のSDGsは「大衆のアヘン」か？ グリーンリカバリーか、脱成長か、などを語り合う。

第2回は宮本先生が「公害調査が研究の転機に」などと、「共同社会的条件の政治経済学」の端緒を語る。斎藤さんもマルクスのエコロジー思想と体制論、気候変動問題へと話を進める。紹介したいことは多いが、ここでは宮本先生の斎藤さんをはじめとした「若い世代への期待」のところを一部、紹介したい。



斎藤さんがいる大阪市立大学は社会政策学者の関一(1873-1935)が大阪市長のときに構想した市立大阪商科大学が前身ですね。当時は市町村が大学を設立することはできなかったの、関市長は政府に法律を改正してもらい、市民の支持を得て全国初の自治体大学をつくった。その伝統が生きていて、ぼくが大阪市大にいるときも校風はとても自由でした。当時、公害問題を大学の教育に持ち込みたいとおもって、宇井純さんと相談していました。宇井さんは東大で反対されて結局、自主講座を開きましたが、ぼくは大阪市大ならできるとおもった。実際に、理学部の生態学が専門の吉良童夫さんとぼくが責任者となり、1970年4月に公害問題論の講座を立ち上げました。全学向けの講座として講堂でやったんだけど、たいへん人気がありましてね。学外の人もたくさん聴講に来て、若い人たちに影響を与えることができた。



いま、これだけ地球環境の危機が叫ばれているんだから、斎藤さんもそういうことをやるべきだとおもいますよ。大学の学際的な講義として。いまの大学を見ていると、自分の研究や研究費をいかに守るかばかりで…研究費がどんどん削られるから仕方ないとはいえ、みんな縮こまっていますよね。だけど、それじゃだめで、やはり社会が直面している重大な問題にこたえるのが大学ですよ。

運動との関係でいえば、研究者は観測班みたいなものだとおもいますね。運動が対峙している相手の言い分がほんとうに正しいかどうか、それを判断するすぐれた観測班であればいい。現場に行くことは絶対に必要ですね。パソコンのキーボード叩けばある程度情報は入るけど、そういう情報には必ず誤りがありますから。

大阪市立大学は大阪公立大学になり、斎藤さんは4月から東京大学に移った。残念ではあるが、斎藤さんには宮本先生が期待されるように、東京大学で公害・環境問題の学際的な講義、「人新世の環境学」を開講してほしい。

(2022年5月28日)